

平成24年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）（④企10-12-2/5）

第46回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」

企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年度で46回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。昨年に引き続き「モノ／イメージとの対話」とのテーマを掲げることとした。個々の講演内容は以下の通りである。今年度は、台東区区政60周年にちなみ、上野にかかわるテーマを選んだ。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は2日間でのべ176人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、120人から回答を得た（回収率：68.2%）。結果は、「たいへん満足した」47人、「おおむね満足した」44人、「普通だった」15人、「不満が残った」0人、回答者の75.8%が満足感を得たことがわかった。

第1日：2012（平成24）年10月19日（金）1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・山梨絵美子（東京文化財研究所）「徳川霊廟を描いた画家たち」

近代絵画史の主流には位置づけられて来なかったが、明治期には日光や東京の徳川霊廟を描いた水彩画が多数制作された。それらの作者は工部美術学校に学んだ画家たち、五百城文哉とその周辺、及び河久保正名とその周辺という3つのグループに分類できる。本レクチャーでは、それらの画家たちとその作例を紹介するとともに、それぞれの画風の特色を明らかにし、制作の背景について考察した。

・白適銘（台湾師範大学）「上野モダンから近代文化体験へー陳澄波が出会った近代日本ー」

1926年、東京美術学校在学中であった陳澄波は台湾人として初めて帝展西洋画科に入選した。それ以後、帝展、台展など官展での受賞を重ね、日本植民地時代の台湾及び上海で現代美術の指導者として大きな役割を果たした。彼は東京美術学校在学中（1924-29）に上野を中心に東京の各地を訪れ、数多くの作品を残している。それらの作品から、陳澄波がいかに現代美術の発信地であった上野で「技」を身につけ、現代風景のイメージを作り出していたか、また、現代化によって生まれた美術・文化や日本近代の美術社会の実相を、知識のみならず「心」で体感し、「現代画家」というアイデンティティを構築していったかを考察した。

第2日：2012（平成24）年10月20日（土）1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・丸川雄三（国際日本文化研究センター）「連想が結ぶ美術史の点と線ーアーカイブスから見えるものー」

明治大正期を代表する洋画家である黒田清輝の生涯を、東京文化財研究所が蓄積する豊富な資料そのものに語らせることはできないだろうか、と考えた。本レクチャーでは、黒田清輝の作品や写真などのイメージと、日記や著作などのテキストとを相互に関連づける具体的な取り組みを紹介し、ある画家の作品や人物の成り立ちを、多様な情報源から直接感じ取ることができる「連想するアーカイブス」の可能性を探った。

・田中淳（東京文化財研究所）「1912年10月20日・上野・美術」

100年前の1912（大正元）年10月の上野では、第6回文部省美術展覧会が開催されていた。この当時は、連日多くの観衆を集め、美術の鑑賞が大衆化されていた時代だった。同時に、この年を前後に、美術は大きく変化する兆しがあらわれている。本レクチャーでは、この100年前の時代と上野に焦点をあて、「個性」、「自己」を基点にした近代的な精神の拡充を背景にした、新しい芸術の誕生の様相を述べた。